

## 「広島湾への思い」

つなぎ、つながる

06年12月7日 中村 敏

【埋め立て】 広島湾で1941年以降、水深10m以浅の25%が消失したとの推算がある。約2,900ha。広島市民球場の約1,200個分に相当する。西部開発、海田湾、五日市・廿日市、出島などのような大規模な埋め立てはもうないかもしれないが、小さな埋め立ては続く懸念がある。広島湾に50年以上慣れ親しんできた漁業者によると「陸の人たちは、海は土地をうみ出す場と考えている」。海にはいろんな命と豊かさがつまっているのに、宇面でもとらえているように思うという。行政も自分たちは事業遂行のために必要最小限の埋め立てをしているだけという思考に陥りがち。この埋め立ては、広島湾にどんな影響を与えていくのかといった大局的な視点はなかったように思う。埋め立てをなくすには、全体への想像力と連帯感が欠かせない。広島湾にかかわる国の機関、県、市町をつないで、それぞれが広島湾を守る意識でつながることを期待したい。

【モ場】 広島湾でアマモ場が唯一、広範囲に残っているのは米軍岩国基地周辺の海域。その貴重なモ場の多くが、滑走路の沖出し工事で消失。一部を周辺水域で回復させる調査と事業を広島防衛施設局が担当している。広島湾のアマモの命運がかかる事態なのに湾関係の行政のまとまった動きは見られない。岩国のアマモとつながることは広島湾再生推進会議の大きな課題。

【太田川】 森林には海を豊かにする滋養がある。カキ養殖に携わる人たちが太田川の上流や源流で植林に努めている。ところが広島湾につながる肝心の太田川の状況が芳しくない。森林水は水力発電や工業用水、水道水などに利用し尽くされて湾までたどり着く水量が少ない上、成分的にもやせているといわれる。水力発電所を多数持つ中国電力も広島湾再生につながる知恵を出し、工夫をしてほしい。「再生推進会議」にオブザーバーとして迎える時。

【次世代】 広島湾再生といっても、かつての姿を知っている世代は限られている。いまの若者や子どもたちにとっては、現状の広島湾がすべて。広島湾の原風景を次世代につないで「想像・創造」してもらおう手立てがいろいろある。たとえば人と海辺が一体となっていた浜。その面影を伝える写真や資料などの収集と保存、古老らからの聞き取りなどを急ぐ時期に来ている。時間はあまりない。

中国新聞の瀬戸内海報道の一部

- ◇ 瀬戸内海（1957～59年）
- ◇ よみがえれ瀬戸内海（71～72年）
- ◇ 再生から創造へ 瀬戸内経済（82年）
- ◇ 広島湾（84年）
- ◇ 瀬戸内海を歩く（97～98年）
- ◇ 海からの伝言—新せとうち学（98年）
- ◇ 海砂採取追放キャンペーン（98年）
- ◇ しまなみ海道開通に伴う連載、特集（99年）
- ◇ ふるさとの海—瀬戸内海国立公園指定70年（2004年・写真企画）
- ◇ 神宿る みやじまの素顔（05～06年）